

リービ英雄論：表記と音の越境

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 松浦, 光汰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027598

リービ英雄論

—表記と音の越境—

南 富 鎮・松 浦 光 汰

1 はじめに

リービ英雄の日本語による一連の創作はそれ自体がいわゆる「日本語文学」として一般的に認識されているが、厳密に言うとは必ずしもそうではないかもしれない。日本語が作品全体の基本言語にはなっているものの、作品中には英語や中国語が地の文として少なからず散りばめられている。それに加え、ルビなどによる二重表記が複雑に行われ、視覚的にも違和感を与える日本語表記になっている。すでに拙論でも言及したが、リービ英雄文学の根底に非在と不在をめぐる複雑な越境性があるとすれば¹、言語表記においても日本語の揺らぎが見られるのはあるいは当然なのかもしれない。つまり、リービ英雄の「物語としての越境」はそれ自体が個別に起こっているのではなく、「表記の越境」と同時発生しているようにも思われる。

リービ英雄文学の主人公たちは一つの領域から別の領域へと越境をくり返しているが、こうした越境には必ずと言っていいほど、言語による境界とそれともたらず違和感が綴られている。身体的あるいは場所的な越境は、言語的もしくは言語意味的な越境と同時に、それを文学作品化した「物語としての越境」は文章表記にまで重層的に浸透していくのである。こうした特徴はリービ英雄文学の個性の表出でありながら、他方では、もしかすると従来に看過されてきた越境性の本質をリービ英雄が克明に描き出しているのかもしれない。本論はこうした点に注目し、リービ英雄文学の越境性を文学思想的な問題に加え、特に文字として表記方法に注目した。それを「表記の越境」と規定し、リービ英雄文学を読み解いていくのが本論の中心的な試みである。

¹ 南富鎮・松浦光汰「リービ英雄論—喪失としての不在と非在」(『人文論集』第70号の2、静岡大学人文社会科学部、2019)

2 ルビ表記の越境

リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』の本文を注意深く観察するとルビ表記による揺れと越境を見出すことができる。たとえば、主人公のベンが領事館やアメリカの家で暮らしている場面では「前廊^{ポルチコ}」や「客間^{パーラー}」というように、漢字に英音カタカナのルビが付されている。しかし、ベンの家出以降になると「しんじゅく」や「ぜんがくれん」といったひらがな表記が散見されるようになる。つまり、英音ルビ表記とひらがな文中表記にベンの過去と現在が対比をなしているのである²。これは一体なにを意味しているのだろうか。ベンの過去記憶における英音ルビ表記とは日本語を英語に置き換えていくベンの言語認知のプロセス、つまり英語を言語認知の中心に据えていたことの表れとしても解釈できる。となると、現在記述におけるひらがな表記とは、英語による中間的な介在を伴わない日本語の音声で直接的に事物を捉えていく過程の表れということになる³。そうした機微は「日本に来て、どうして英語で喋っておるんですか」という安藤の質問に、ベンの次のような返答からも窺える。

ベンはうんざりした。日本語を話さない留学生たちにも、英語しか話さない日本人たちにも、そしてその中にいる自分にも。英語の部屋、英語が貨幣価値をもって支配するこの部屋。この部屋の中で交わされたことばを思い出すほど、うんざりした。うんざりするほど、この部屋の中のすべてが分った。

ベンは両親が離婚した後にアメリカで母親と共に生活していたが、^{ヴァイジテーションライヴ}面接権にしたがって父親と日本の横浜に住むことになる。しかしベンが暮らす領事館という場所は言うまでもなく⁴、日本語の空間ではない。そこがアメリカの延長線

² 表記の揺らぎについては帳雅婷による指摘がある。『天安門』における「毛沢東」表記が「Mao」「毛主席」「マオ」と変遷するのは、「幼少期の台湾、青年期のアメリカ、中年期の日本」へと変遷する「主人公の越境軌跡」であるとされる。(帳雅婷「リービ英雄『天安門』における台湾の家：幸福な原風景を求めて」『多元文化』12巻、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、2012)

³ 文芸評論家の井口時男はこうした現象を「日本語という言葉によって強引に物をつかもうとするときの緊張感みたいなもの」として解釈している。(創作合評「リービ英雄『新世界へ』」『群像』44巻11号、講談社、1989年11月号)

⁴ リービは横浜の領事館に「こちら側は、日本に在りながら日本語の聞こえない世界だった」とし、日本語学校は「ワタクシハベイコクジンドゴザイマス」のようなガイジンとしての外交辞令を教え込む場所と認識していた。リービ英雄「千年紀城市に向かって—中国人になったユダヤ人

上でしかないために、ベンは「この部屋の中のすべてが分った」のだろう。自身を「かざりもの」たらしめる英語にうんざりしたベンは、英語の空間を飛び出し、日本語の音に満ちた空間＝星条旗の聞こえない部屋を求めたのである。この「物語としての越境」が、過去記憶において英音ルビ表記を用いる、現在記述において平仮名を用いる、という2つの言語を用いた「表記の越境」によって効果的に表現されている⁵。

小説家の大江健三郎も「^{パトロン}師匠」や「^{トリ ア ティ ク}三枚続きの絵」のように⁶、ルビ表記を用いて創作をしている。大江はこのような表現方法を用いて「日本人としてフランス語を読んでいる自分があるフランス語を日本語にうまく置き換えることができ、しかもこういう表現ができる日本語はなかったと感じる興奮（＝バイリンガル・エキサイトメント）⁷」を視覚化している。これも「表記の越境」がなされている例の一つだろう。

ルビは外来語に相当する日本語がなかった場合に、その音を漢語に当てはめる形でなされた日本語化が起源とされている⁸。これは「直訳（原語借用）」と呼ばれ、その後には内容の分かりやすい日本語を作って訳語とする「義訳」の過程を経ることで、日本人はさまざまな近代的知識の日本語化に成功した⁹。このような歴史を踏まえると、ルビは外国語を日本語へと翻訳する過程の象徴であり、ウチとソトが強く意識される表記形態と言える。強烈な複数文化性を帯びているルビが「物語としての越境」を表層から強調し、「物語としての越境」が表層を成す記号（ルビ）に深層的な読みを与える相互関係の基に、『星条旗の聞こえない部屋』の過去記憶は構築されている。

を“探す”旅』『中央公論』119巻11号、中央公論新社、1887年11月号

⁵ 文芸評論家の江藤淳は、リービ英雄の日本語創作の試みを「やはり日本語を地の文にして文学テキストをつくるときに、英語でもできないし、中国語でもできないような多層性が可能だということに着目して、それをやってみようと思っているのではないか」と捉えている。（創作合評「リービ英雄『天安門』」群像51巻2号、1996年2月号）

⁶ 大江健三郎『宙返り（上）』講談社、1999

大江健三郎『宙返り（下）』講談社、1999

⁷ 対談「異言語に身を晒す—新しい文学のモデル—」『世界』756巻、2006年9月号

⁸ 亀井秀雄『日本人の「翻訳」—言語資本の形成をめぐる—』岩波書店、2014

⁹ 渡辺実『日本語史要説』岩波書店、1997

3 ひらがなの世界

(1) 平仮名表記の越境

ルビとの対比を踏まえると、平仮名表記は現在記述における認識プロセスの中核を担う媒体と解釈できる。作家のロジャー・パルバースが「第一言語における音の要素は（そもそも言葉は音の組み合わせだけでできています）永遠に頭のなかに刷り込まれる、物事のイメージを形作っています¹⁰」と述べたように、母語と音とイメージ（意味）は緊密な関係で結ばれている。ベンの母語は英語であり、それゆえに彼が持つイメージ（意味）は英語の音と結びついているが、日本という異言語の領域においてそれらが眼前の实在と符合することはない。そこにはただ未知なる「音」が存在するだけである。とくに「しんじゅく」や「ぜんがくれん」というような「意味になる以前の、呪術の恵みを孕んだ」固有名詞の音に相当する漢字を想見し、理解することは困難と思われるが¹¹、むしろリービはこの「お前にはそんなものは読めるはずがない、分かるはずがない」という強いメッセージに対して「それは違う」という「強い対抗心」が生まれたと述べている¹²。この対抗心が生じた青年期を描いた『星条旗の間こえない部屋』は、異音との邂逅、音との対決を描いた物語であり、平仮名を用いた表現が異言語に向き合う精神性を如実に示している¹³。

(2) 「物語」とひらがな

「物語としての越境」を意識することで読み取れる平仮名表記の解釈として、英音ルビとの対比構造だけでなく、漢字との対比構造についても注目すべきだろう。日本語の形態は、伝来した古典中国語に影響を受けた「漢字」、漢文に付けられた訓点から派生した「片仮名」、漢字の全体を変形させた「平仮名」の三種に分類される¹⁴。特に「漢字」と「平仮名」について、通説によれば漢字を

¹⁰ ロジャー・パルバース『驚くべき日本語』（早川敦子訳）、集英社インターナショナル、2014

¹¹ 人類学者の川田順造は「よそのもの（人類学者）」に「土地の人が体得しているのと同じ意味を、その土地にかかわる地名、人名のすべてについて、自分のものにすることは不可能である」と述べている。川田順造『文化を交叉させる—人類学者の眼—』（青土社、2010）

¹² リービ英雄『新宿の万葉集』朝日新聞社、1996

¹³ 文芸評論家の松原新一はこの作品について、「日本語を「意味」ぬきに先ず「音」という聴覚映像として感受し、もどかしい思いをかかえこみながらベンが「ことばという水」を汲もうとしていく切実な経験の叙述は、まことにうつくしい」と称賛している。松原新一「日本への越境の物語—リービ英雄『星条旗の間こえない部屋』」（『群像』47巻3号、1992年3月号）

¹⁴ 今野真二『仮名の歴史・日本語学講座⑨』清文堂出版、2014

今野真二『漢字とカタカナと平仮名—日本語表記の歴史』平凡社、2017

音として用いた万葉仮名が「男手」、曲線的でたおやかなその字形や書きぶりから平仮名が「女手」と呼ばれていたようだ¹⁵。このような起源を考慮すれば、平仮名と漢字の対比構造が浮き彫りとなる。そして作中における平仮名の象徴をベンだと仮定すると、漢字の象徴には平仮名を「平気で理の均整をくずして官能に溺れる文化の表記」として「中国語には劣る」と言い放つ父親が該当する。ユダヤ系アメリカ人であるベン父親は、外交官として家族を連れ、台湾をはじめとしたさまざまな国を転々としていた。そして小学校を卒業する半年前に父親の不貞によって両親が離婚し¹⁶、その後中国人女性と再婚したことから、純血主義に反するものとして一家は一族から疎外されることとなる。これらの要因が積み重なり、ベンアイデンティティは不確かなものとなっている。「殺したかった」と思うほどに膨れ上がる憎悪から父親を捨てることを決意したベン、家という境界を越え、ひらがなの世界へと逃避する「ぼうめいしゃ」になるのである。

リービは平仮名表記を用いることで英語との対比及び漢字との対比を表層から強烈に意識づけ、「異音との邂逅」そして「父親からの逃避」を含む「物語としての越境」を綴るのである。もちろんここにおいても深層的な「物語としての越境」が、表層的な平仮名表記に単なる表記体以上の意味を与えている。小説家の江藤淳が「文学者の文体」は「彼らひとりひとりの行動が、各々の存在とときはなすことのできない」ことから「必然的に個性的なもの」になると主張しているように¹⁷、リービが生み出した具体的なベン物語によって、ルビや平仮名から成る表層の表記文法が文体として特徴づけられるのである。

4 表記が示す越境

リービは複数の領域を作中に登場させる。『星条旗の間こえない部屋』の「アメリカ」と「日本」や「西の蔵の声」における「中国」や「西藏地区」などがその例である。これらの境界を身体的に超越する、というのがリービの越境文学であり、それを構築するうえで、リービはさまざまなかたちで描写される越境性を無数につなぎ合わせ、大きな「物語としての越境」を描き出している。

¹⁵ 石川九揚『平仮名の美学』新潮社、2007

¹⁶ このような「親に棄てられる」と言い換えられる体験について、村上春樹は「その種の記憶はおそらく目に見えぬ傷跡となって、その深さや形状を変えながらも、死ぬまで付きまとうのではないだろうか」と述べている。村上春樹『猫を棄てる—父親について語るとき—』文藝春秋、2020

¹⁷ 江藤淳『作家は行動する』講談社、1967

この表層構造に現出する表記が示す越境について注目していく。

(1) 錯綜する境界

まずは『国民のうた』に見出せる異常と正常の境界を取りあげる。主人公「かれ」には精神遅滞を思い、ほとんど断片的にしか言葉を話すことが出来ない弟がいる。作中を通して、弟を含めた精神遅滞を患っている人物が発した言葉のみが英語もしくはローマ字で表記され、それ以外の人物全員の会話が日本語で書かれている点から、精神の正常と異常の境界が言語表記によっても示されている。境界の錯綜と混乱が言語表記の混乱をもたらす。同じく精神遅滞を患った人物が登場する坂口安吾の「白痴」では、「私は帰りたい、私は来なければ良かった、という意味の言葉であるらしい」(傍点筆者)のように¹⁸、主人公の視線や解釈を通してのみ精神遅滞を患う「女」の言葉の意味が推測されている。

安吾とは異なり、リーベは二種類の言語で創作を行うことで、読み手が一方に正常、もう一方に異常という属性を付与するように仕向けているのだろう。そして終盤部分における、精神遅滞の四十を過ぎた男が緑と金色の包み紙のプレゼントを四方に投げながら、「Take me home! Take me home!」と集会場の空気をつんざくような少年の声で叫んでいる場面に注目してみると、この「家に帰りたい」という欲求は、「かれ」が少年時代に故郷だと思っていた家を追い出された時から持ち続けてきた欲求だとわかる。さらに同様の欲求を物語の序盤に出てくる白人ホームレスも後半部分に出てくる阿部公房も持っている。つまりこの点においては誰もが失った時点から進んでいないということになる。一見異常と正常が明瞭に区別されているように思えるが、それはあくまでも表層的な印象にすぎず、深層的に意味をとらえてみると、印象による境界は瞬時に錯綜するのである。

『仮の水』にもその好例となる境界が見出せる。この作品のタイトルにも使われている「仮」という言葉だが、作品を読み進めるにつれて日本語的な意味での「仮」ではなく、中国語の假(假)のニュアンスに近い「偽」のという意味で使われていることがわかる。また「仮」という言葉は真(本物)を暗示する。この「真」と「仮」の境界に注目していく。主人公である「かれ」には標準中国語の素養がある。しかし旅行している中国の田舎では方言が標準として使われており、「かれ」には理解できない言葉が多い。そのため精神的に不安定な状

¹⁸ 坂口安吾「白痴」(『坂口安吾全集4』筑摩書房、1990)

態となっている。それを示すのが「部屋の外も部屋の中も、凧いだり荒れたりする方言の海、その中でかれはひとり黙り込んだ」という描写だ。近代社会において、標準語は圧倒的な優位性を持っており、方言は排除されるべきものとして扱われてきた¹⁹。これは前者が「真」であり、後者が「仮」であると言い換えられる。しかし辺境においてこの力関係は、時として逆転する。そもそも標準中国語と方言の区別も1950～1960年代に定められたものである。これらの描写から「真」や「仮」というものは時代や場所が変われば変化するものだという考えが導き出せるかもしれない。

主人公が列車に乗っている際に仮票（偽乗車券）騒動が起きる。偽造した切符で列車に乗車する行為は犯罪である。この状況において、「仮」のものは悪である。

トイレで出会った老人の持っていた松葉杖を「かれ」は「仮の足」と表現した。老人は足が不自由なため、松葉杖を頼りにしている。本来であれば人間の体を支えるのは足である。そしてそれを補助する松葉杖が「仮の足」と表現されることは当然である。だが実際において松葉杖は「真」である足として扱われている。ここでは「仮」のはずの松葉杖が老人の「真」の足となっている。これも「真」と「仮」の逆転と言えるだろう。この状況では「仮」のものは善である。このような「真」と「仮」を中心にした境界の錯綜が、混沌とした現実世界の映し鏡として機能しているのである。

リービの作品において不安定で揺らぎ続けているのは主人公のアイデンティティのみではなく、彼を取り巻く世界そのものに無数の揺らぎが観察できる。

（2）境界を示す言葉

『星条旗の聞こえない部屋』には、発せられた日本語の音がベンに意味をもたらさない場面が散見される。その中でも安藤の「おら教えてやるよ」と「おれが教えてやる」が意味の伝達に失敗した描写は、ベンが日本語に未だ不慣れであることを示すと同時に、日本語の特徴を非常に良く捉えている。文芸評論家の清水良典は日本語の人称について「欧米語のように人称が単一で、主体が「I（あるいはIch、Je、Yo）」であることの自明性を持つ言語と異なって、主語自

¹⁹ 日本において方言撲滅の極端な指導方法として、教師の摘発や生徒の告発によって、方言を使用した生徒の首に札を下げさせたり、背中に張り付けたりする例が有名である。真田真治『標準語はいかに成立したか—近代日本語の発展の歴史』創拓社、1991

体に任意の選択性がある²⁰」と指摘している。つまり日本語で会話をする場面で当事者は、相手と自分の間柄、年齢の差、性差など様々な条件を踏まえつつ人稱を選択することを強いられるのである²¹。このような前提知識を必須とする言語的特徴が、日本語を学ぶ人物にとって大きな壁となっていることは想像に難くない。リービ自身も「話し言葉のレベルで難しかったのが、「わたくし」「ぼく」「おれ」などの使い分けだった²²」と語っている。こうした性質は往々にして優越性と結びつけられ、母語話者による「日本語神話」が誕生する契機となりうるが²³、現実として、リービをはじめ詩人のアーサー・ピナードや翻訳家のロジャー・パルバースなど多くの非日本語母語話者が活躍をしている。彼らのような存在が、閉ざされた（と錯覚されている）日本語の境界を広げていくのである。

（3）境界に阻まれる言葉

越境文学とは、主人公が何らかの「境界」を越えていく物語である。多くの場合それは国（言語）の境である。母語を捨て去り、異言語空間に突入するということは、母語に結びついた文化を振り払い、裸の状態ですら異文化に身を晒す行為である。しかし自己の根幹を築く土台となった母語、それに結びついた文化的感覚が完全に失われることはない。亡命作家のユゼフ・ヴィトリンが「言葉の帰還」と呼び、「既に忘れられ、現在の生活にはもはや使われない言葉が、ひとりりで現在の意識に帰ってくる²⁴」現象を指摘しているように、人が完全に母語の鎖から解き放たれることはないのだろう。その母語と習得言語の境界線上で揺れ動く人間の姿が克明に描写されているのが『千々にくだけで』という作品である。これは9.11を題材としている。主人公エドワードがカナダのホテルにて微睡んでいる際に、テロに対する被害国、加害国の主張の聲がテレビから流れてくる。

²⁰ 清水良典『文学の未来』風媒社、2008

²¹ 言語学者の鈴木孝夫は日本人が「自己規定の型を心的構造に持っている」と述べ、それが原因となって「(相対的に自己規定が困難な)未知の人とことばをかわすことに対する強い心理的抵抗」が発生すると主張している。鈴木孝夫「日本語の自称詞」（『日本文化と世界』講談社、1972）

²² リービ英雄『我的日本語』筑摩書房、2010

²³ 多和田葉子はこのような母語意識を「科学の隠れ蓑さえ着ていない迷信だ」と批判した。多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2018

²⁴ ユゼフ・ヴィトリン「亡命の栄光と悲惨」（『やっぱり世界は文学でできている—対話で学ぶ—世界文学）連続講義2—』、沼野充義訳、光文社、2013）

Evildoers、と男が言っていた。悪を行う者ども、と下手な和訳が頭に響いた。日本語にはすぐならない言葉だった。

Infidelsという英語の字幕が現れた。異教徒ども

Evildoersはアメリカ側、Infidelsはイスラム側の発言である。エドワードが和訳した「悪を行う者ども」「異教徒ども」は、日本語の文脈でとらえると違和感を拭い去ることが出来ない。リービもこの現象について「英語とアラビア語、あるいはキリスト教の文脈とイスラム教の文脈が、両方ともまともな日本語にならないこと、不自然な日本語にしかならないということが持つ意味は深いような気がする²⁵⁾」と述べている。

このような宗教的要素がまともに翻訳されない現象は、何を意味しているのだろうか。国際政治学者のサミュエル・ハンチントンは、それぞれの文明の間には「歴史、言語、伝統、さらには宗教」によって規定される「政治的なイデオロギーや政治システムをめぐる違いにもまして根本的」な文明の「隔たり」が存在すると指摘している²⁶⁾。これを踏まえると、日本語の文脈の中で「evildoers」「infidels」が「まともな日本語」にならないということは、日本とアメリカの間に存在する言語的、宗教的な懸隔を示すのかもしれない。日本語と結びついて形成されている日本文化の範疇には「悪を行う者ども」も「異教徒ども」も存在しないのだろう。一方で、先の分析に用いた日本語の自称詞は、英語と結びつく文化領域には存在しないかもしれない。ここに翻訳の不可能性が浮かび上がるのである。二つの根本的な土台を共有しない文化圏の言語を用いてバイリンガルの作品を創作するリービの感覚は、つねにその可能性と不可能性の境界線上で揺らいでいる²⁷⁾。

(4) 境界と創作

多くの作家が複数言語の境界線上で揺れ動く人間の姿を、多様なかたちで描

²⁵⁾ 講演「越境文学の冒険」『世界は文学でできている—対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義1』、光文社、2012

²⁶⁾ サミュエル・ハンチントン「文明の衝突—再現した「西欧」対「非西欧」の対立構造—」『中央公論』108巻9号、1993年8月

²⁷⁾ 翻訳者の陣野俊史は、9.11の犠牲者を「殺された」と訳すのか「亡くなった」と訳すのか、という英語と日本語による言葉の「振幅」の中で初めて「9.11は捉えられているのではないか」と述べている。陣野俊史「『その後』の戦争小説論③—リービ英雄と山田詠美、「9.11」と砂漠」(『すばる』31巻3号、2009年3月)

いている。たとえば水村美苗の『私小説 from left to the right²⁸』は日本語主体の文章に英語を混ぜた作品である。この作品は横書きで綴られており、西洋的な要素が視覚的に強調されている。物語のあらすじは、アメリカに住む姉妹が長電話をするというもので、そこで交わされる日本語主体の会話のなかに英語が挟まれている。水村は12歳からイエール大学大学院を修了するまでアメリカで生活していたため、自身のバイリンガルの言語感覚を主人公たちに付与しているのではないだろうか²⁹。このような複数の言語感覚を用いた創作行為について、リービは「ひとりの人間にふたつの書き方、ふたつの表現の仕方が与えられたとき、ふたつの言葉をどちらも使ってみたいと思うのは、非常に自然な衝動なのではないか³⁰」と当然の帰結だとしている。

バイリンガルの言語感覚は文学創作にどのような影響をもたらすのだろうか。それを探る手掛かりとして、哲学者であるミハイル・バフチンの主張を紹介したい。

文学的創造の過程において他者の言語との相互照明はまさに自己の（そして他者の）言語の「**世界観としての**」側面を、その内的形式を、そして固有の価値評価のアクセントの体系を照らしだし客観化するのである。他者の言語に照らしだされた場において文学の想像意識に対して立ちあらわれるのは、もちろん自己の言語の音声学的体系でも、その形態的特質でもなく、その抽象的な語彙でもない。そこに立ちあらわれるのは外でもない、言語を具体的な、最後まで翻訳しきれない世界観に対するもの、即ち**一つの全体としての言語の文体**なのである³¹

要するに、言語はそれぞれが基になる文化などによって内的形式が定められており、それゆえに少なからずその言語特有の領域を保持している。それは他者の言語の視点を得ることで客観化されるが、その特有性から他言語へと翻訳することが不可能であり、その言語全体の特徴を示すような文体と言えるということだろう。先の分析でも紹介した「evildoers」などはその一例であるかも

²⁸ 水村美苗『私小説 from left to the right』新潮社、1995

²⁹ 哲学者ヴァルター・ベンヤミンは「人間はおのれ自身の精神の本質を人間の言語という形で伝達する」と主張している。ヴァルター・ベンヤミン『言語と社会—ヴァルター・ベンヤミン著作集3』佐藤康彦訳、晶文社、1981

³⁰ リービ英雄「万葉集エキサイトメント」（『万葉集の詩性』株式会社KADOKAWA、2019）

³¹ ミハイル・バフチン「小説の言葉の前史より」（『小説の言葉』伊東一郎訳、平凡社、1996）

しれない。それぞれの言語が完全に境界を越えることは不可能であろう。しかしその不可能性に極限まで迫る創作行為は、言語に内在する本質をとらえようとする試みであり、そこにこそ新たな言語、文学の可能性が秘められていると考えられないだろうか。小説家の坂口安吾は、ただ「必要」な言葉によって生み出される「やむべからざる実質」が美を生むと述べている³²。この「必要」な言葉を求める執筆過程において、バイリンガルの言語感覚は表現欲求を可視化する言葉の選択肢を豊富にし、窮極的に相応しい言葉へと迫ることを可能にするかもしれない。

4 表記と音の越境

複数の言語によって構成されるリービ英雄文学の表層には、さまざまな音が溢れている。そしてルビや平仮名も音を示す表記形態であり、その発せられた音は認識され受け手が持つ言語的知識と合致することで表現内容の伝達を果たしている³³。しかしリービの文学において音はそれ自体が持つ意味を示すだけでなく『失われた時を求めて³⁴』におけるマドレーヌの味のように、それを起点として関連した記憶を克明に想起させている³⁵。その瞬間において、音を媒体とする過去の記憶が現在へと流れ込み、過去と現在の境界の破壊、越境が発生するのである³⁶。本章においてはリービの音に対する執着について論じていく。

リービはアメリカ出身であるものの、6歳の時に台湾の台北に移り住み、その後は台中で10歳までの時期を過ごすことになる。そのため「自分の家はどこにあるのか、あるいはどこにあったのか」と聞かれた際にはアメリカではなく台湾を思い浮かべるようだ³⁷。そうした機微は文学にも反映されており、例えば小説『模範郷』(2016)には次のような故郷の描写がある。

³² 坂口安吾『日本文化私観』(評論社、1968)

³³ ダイアン・ブレイクモア『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門』(武内道子・山崎英一訳) ひつじ書房、1994

³⁴ マルセル・ブルースト『失われた時を求めて I』(淀野隆三・井上究一郎訳)、新潮社、1974

³⁵ 例えば『星条旗の間こえない部屋』には、ベンがアメリカを離れたときに流行っていたフォークソングを日本で耳にし、当時の記憶が呼び起こされる描写がある。

³⁶ 川端康成の「哀愁」(1947)における「歌」も同様の役割を果たしていると考えられる。川端康成「哀愁」(川西政明編『川端康成随筆集』岩波文庫、2013)

³⁷ リービ英雄「イーラ・フォルモーサー—四十二年ぶりの台湾」(『すばる』28巻3号、2006年3月)

塙の外からは、ぼくにはわからない大人と子供の、遠い声とすぐ近くの声
が、一日に何度となく、塙に囲まれた広い庭の中まで届いていた。「方言」
であるとはぼくは知らなかった。家に出入りする軍服姿の「国民党」の大人
たちが話す「國語」と違って、塙の外の話し声は僕にはまったく分から
なかった。そして大人たちには、わかる必要があるという態度はなかった

リービの母語は英語であるため、当然周囲から聞こえる中国語はあくまでも
意味の付随しない知覚した音でしかなかったが、それがむしろ強い印象を残す
要因となった可能性がある³⁸。このような音を中心とした故郷の家の想起はリー
ビの文学が持つ特徴の一つと言えるだろう³⁹。

文学者のアライダ・アスマンは、この想起によって生み出される過去の記憶
の領域について「個人あるいは集団が、意味を構成し、自分たちのアイデンティ
ティを根拠づけ、自分たちの生活を方向づけ、自分たちの行為を動機づけるた
めに、過去を部分的に照らし出すことで発生する⁴⁰」と主張している。要する
に、過去の記憶の参照は、その時点から現在までを貫く自己のアイデンティティ
を確認すると同時に、その在り方を維持するための方向性を導き出すための行
為ということだろう。これを踏まえると、リービの文学における過去記憶の想
起の描写には、リービ自身を規定するアイデンティティの根源が示されている
可能性がある。それは他でもない「音」と関連しているのではないだろうか。
幼少期における台湾、青年期における日本、壮年期における中国それぞれに共
通する点は、リービにとって異音の空間であることだ。大国アメリカに生を受
けたにも拘らず、周縁のアジアへと入り込もうとする不可解な越境軌跡の根底
には⁴¹、自らにとって意味の付随しない言語空間に身を置き、自己存在を肯定
しようとする欲求が存在するのかもしれない⁴²。

³⁸ リービ英雄は「子供だから何が母語か何が外国語かという区別がほとんどなく、もちろん自分の
言葉ではないんだけど、母語のように聞こえて、その記憶がどこかに眠っていた」と述べて
いる。対談「中国、そして現代文学へ」(『群像』61巻8号、2006年8月)

³⁹ 例えば「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」には、故郷である「あの島の家」を思い出す
と、中国語で「李先生！」と呼んでいる声が響くというような描写が見られる。リービ英雄『ヘ
ンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』講談社、2002

⁴⁰ アライダ・アスマン『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社、2007

⁴¹ 文化人類学者の山口昌男は「人間は、アイデンティティを再確認するために中心を強調するか、
周縁を強調するかという方法をとってきました」と述べている。山口昌男『周縁・山口昌男著作
集5』今福龍太編、筑摩書房、2003

⁴² 文化人類学者の川上郁雄は、複数言語圏を経て成長した子供のアイデンティティ形成において、
自らの体験に根ざす複数言語を使った「他者とのやりとり」と「主観的な言語能力意識」が重要

音を用いて故郷を描いた作品として、井伏鱒二の「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩をして私は用語について煩悶すること⁴³が挙げられる。あらずじとしては、主人公「私」が自身の生まれ育った故郷に残っていた独特な呼称の風習について回想するものである。例を挙げてみると、地主の家庭では親を「オットサン」「オッカサン」と呼ぶように子供を教育し、一方でその子供たちは周囲から「〇〇サン」と呼ばれる。これは階級が下になるにつれて「〇〇ツァン」「〇〇ツァ」と変化していく。「私」はこのような風習に疑問を抱きつつ、語り手として物語を展開させていく。

文学者の塩野加織はこの物語の特徴として「まず階級がありそれに応じて呼称が異なるという従来の把握の仕方とは逆向きのベクトル（まず音の差異が見出され、それらが意味づけられていくという指向）を持っている」点を指摘している⁴⁴。ここで言う従来の把握の仕方とは、英語学者の中島文雄による「人間は頭の中で言葉をこしらえる、自らが語彙と文法を使ってつくり出す、生み出しているというのですね。そして、頭の中でできたものに音声を与えるわけです。だから、音声というのは一番後から出てくるので、言葉の形というのは、音声より前にある⁴⁵」という主張がその代表例と言えるが、これは明らかにこの井伏の例には当てはまらないだろう。呼称による音の差異があることで、階級という意味が生じているからである。そしてこの呼称は、物心がつく以前から現在に至るまで使用され、井伏に習慣として刻み込まれている。つまり、幼少期からの習慣が現在における自己の行為を規定しており、またそれによって故郷と自己が結び付けられているのである。これは先に述べたリービの状態と非常に近いと考えられないだろうか。

幼少期における意味の付随しない原風景としての「音」が記憶と記憶、現在と過去、場面と場面をつなぐ結節点となり、さまざまな状態における越境を可能ならしめているように思われる。文章全体にあふれる音も、じつはこれに由来しているのかもしれない。

だと述べている。討論「『移動する子ども』からことばとアイデンティティを考える」(『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』細川英雄編、春風社、2011)

⁴³ 井伏鱒二「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩をして私は用語について煩悶すること」(『井伏鱒二自選全集』新潮社、1985)

⁴⁴ 塩野加織「音を聴くこと、音を書くこと—井伏鱒二「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩をして私は用語について煩悶すること」論(『日本文学』68巻11号、2019年11月号)

⁴⁵ 座談会「日本語のために—国語改革を批判する」(『世界』455号、1983年10月)

5 おわりに

リービ英雄における「物語としての越境」は、それがたんに身体移動という個別行為によって発生しているわけではない。表層構造において現出するさまざまな形の越境性がつなぎ合わされ、近代国民国家の国民言語の境界を超越する越境文学が構築されている。本考ではその一部の「表記の越境」に注目し、表層の記号と深層的内容からなる相互作用を検討してきた。たとえば、『星条旗の聞こえない部屋』におけるルビ表記と平仮名表記はその際立った一例になる。翻訳性を持つルビ表記と音声表記形態である平仮名によって「物語としての越境」が視覚的・聴覚的に浮き彫りにされ、「英語から日本語へと逃避」する物語の深層的な側面をも覗かせている。さらに漢字との構造的な対比を強調する意図的な平仮名の多用は「父親からの逃避」という物語に収斂していくのである。

こうしたリービ英雄の越境性は近代国民国家や国民言語の越境に止まらず、さまざまな形で複雑に展開し、拡散していく。たとえば、「国民のうた」においては正常と異常の境界が曖昧化され、頻繁な越境がくり返されている。「仮の水」においては仮と真の境界が液状化し、混沌と化し、終局的には主人公たちにおける共通した存在（不在）の不安をもたらす。さらに「千々にくだけで」では翻訳行為における越境性が注目され、個別言語が持つ壁の向こう側へ永遠に到達できない主人公の孤独な姿が描かれている。リービ英雄の作品はこうした表層と深層における無数の越境性によって構築され、それが総体として複雑で大きな「物語としての越境」を創り出しているのである。そしてそれらを創出する根源として表記形態、意味と音声の分離や違和感がしつこく取り上げられているのである。

表記形態と意味の間に発生する違和感は、視覚的なものと聴覚的なもの的一致とも言えるだろう。いわゆる能記（シニフィアン）と所記（シニフィエ）との不一致、あるいは両者の意図・作為的な分離・隔離作業のようにも思われる。「音声」が唐突に意味情報（言語学的）から分離されて裸で現出されたりする。しかしそれに全く意味がないのではない。言語学的には意味情報を持たないが、その音声によって心像風景が作り出される。違和感が造成される。リービ英雄の記憶に深く根付いている台湾における「音声」がそうした原体験であろう。複雑なルビ、平仮名、駄洒落言語による違和感の創出はリービ英雄のこうした原体験もしくは原風景とも深く関連している可能性がある。しかし少なくともこうした音声と意味をめぐる複雑な解離（分離）と融合（関連付け）が

リービ英雄文学の重要な一側面であることは間違いない。

付記：本論は松浦光汰の卒論研究の一部である。南はその指導・助言に当たった。